



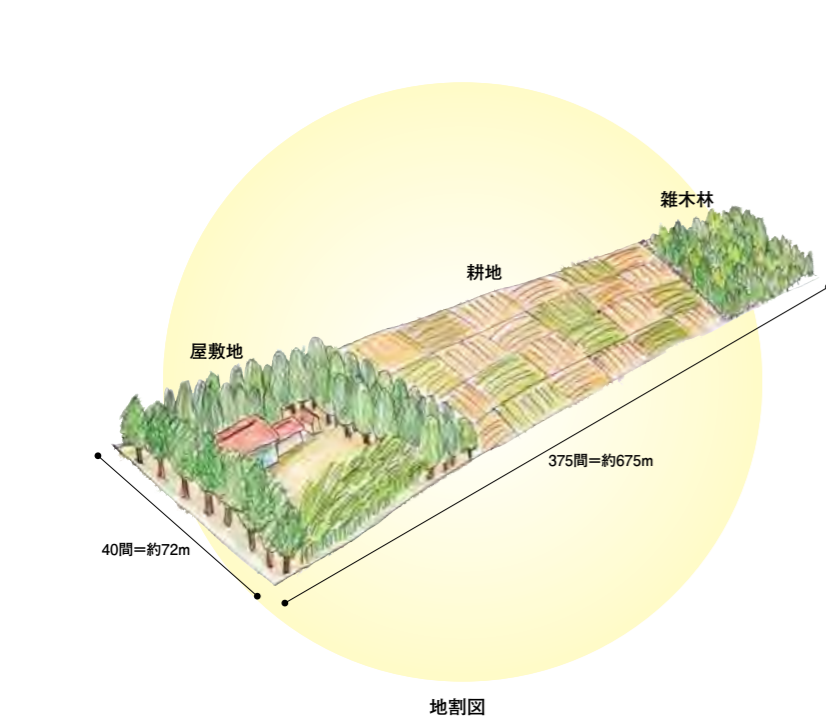
1軒の農家ごとに畑、雑木林が均等に並び、美しい農的景観をつくり出している(写真提供：三芳町)



空撮(写真提供：三芳町)



ボランティアで雑木林の落葉掃き(写真提供：JAいるま野)



■ 歴史

「三富新田」は、江戸時代の元禄期に開拓された武蔵野台地上の一地域である、埼玉県入間郡三芳町上富と同県所沢市中富・下富の総称。この地域は首都30km圏内にありながら、今でも江戸時代に開拓された三富新田を中心とした農地と平地林からなる武蔵野の景観が広がっている。

三富地域のある武蔵野台地は、新田開発前は関東ローム層に覆われて飲料水が得にくい、萱原あしはらなどからなる広大な原野だったが、元禄7年(1694)に川越藩主となった柳沢吉保が、現在の三富新田を開発した。

元禄9年(1696)の検地による屋敷の戸数は、上富91戸、中富40戸、下富49戸の計180戸で、約900haの区域に広がっている。

■ 農景観を形成しているもの

三富地域の農景観を形成しているものとして、独特の「地割」と呼ばれる各区画(農家)の土地利用構成がある。

幅6間(約10.9m)の道の両側にかつて入植した農家が並び、その1軒の農家ごとに畑、雑木林の面積が、均等になるように短冊型に並んでいるという地割だ。例えば上富地区では、1戸の間口が40間(約72.7m)、奥行き375間(約675m)、面積5町歩(15000坪=約5ha)となっている。いわば畑作農業に適した都市計画づくりが行われたのだ。

■ 持続型社会のモデルとなるもの

同地域では現代でいう持続型社会のモデル(=先人の知恵)となる要素が、以下に整理したように数多く見受けられる。

- ①栄養分が少なく水はけの悪い赤土(関東ローム層)には大量の堆肥が投入され、肥沃な土へと造り替えることができた。
- ②雨の少ない時期には季節風が畑の乾いた赤土を舞い上げ、それこそ“赤い風”となって吹きまわった。そこで、三富の開拓農民は、畑の畦にウツギや茶の木を植えてこれを防いだ。なお、植えた茶の木は防風の役割ばかりでなく、商品ともなった。

③家のまわりを囲む屋敷林には竹やケヤキ、ヒノキなどが植えられ、防風の役割を果たした。

④雑木林にはナラやクヌギ、エゴ、アカマツなどが植えられ(二次林)、防風林のほか、燃料となる薪として、また肥料となる落ち葉の供給源として役立っていた。

⑤雑木林について生態系からみた場合、ホンダタヌキやノウサギなどの哺乳類、オオタカ、アオゲラなどの鳥類、カブトムシやミドリシジミなど、里山を代表する生物が生息している。

■ 現在の状況と継承すべきもの

三富地域の農家は経営規模が大きく、畑作農家1戸あたりの耕地面積は県平均を大きく上回っている。農家戸数に占める専業農家戸数の割合や農業就業人口に占める青年農業者(39歳以下)の割合も、県内の他地域と比較して高くなっている。主な生産物はサツマイモ、ホウレンソウ、ダイコン、ニンジン、サトイモなど。

ただし、同地域が都市近郊地帯にあるた

め、相続税納税などの関係から農地転用、雑木林の売却など、これまでに培われてきた農的環境の保全が課題となっている。

事例は、江戸時代の都市計画が今日の美しい農的景観(共有の財産)として結晶されたものといえるが、これら景観はもちろん、現代に生きるわれわれは持続型社会形成のために、背景に横たわる先人の優れた知恵や営々と堆積してきた努力こそ継承する必要がありますといえる。

(文責：社団法人JA総研・星勉)

【参考文献など】
三芳町教育委員会・三芳町立歴史民俗資料館編集「三富新田の開拓」平成14年
埼玉県企画財政部WEBページ「三富新田とその周辺」平成20年7月現在

プロジェクト概要

所在地：埼玉県西部の川越市、所沢市、狭山市、ふじみ野市、三芳町の5市町にまたがる地域